

保育者養成教育における観察画

著者	柴田 精一
雑誌名	大阪城南女子短期大学研究紀要
巻	55
ページ	111-122
発行年	2021-03-20
URL	http://doi.org/10.15043/00001000



〔研究ノート〕

保育者養成教育における観察画

柴 田 精 一

はじめに

昭和20年代、明治以来の国家主義的中央集権の教育体制がくずれ、民主主義教育を実現しようとする動きが始まる中で、独自の美術教育を提唱し自ら教育を実践しようとする民間の教育団体がいくつも台頭した。それらの団体の業績が現在の教育・保育を築く礎になっているといえるが、その中でも、絵の指導の内容・方法の確立を目指したのは新しい絵の会である¹⁾。新しい絵の会は1952年に発足し（発足当初は「新しい画の会」であった。）、幼稚園や保育園で実践的な活動を中心に行っていた。その後1969年ごろから、別の民間の教育団体である創造美育協会が軽視していた美術教育の内容・方法を確立させるべく、描画活動の中に3つの指導領域「経験を描く」「観察して描く」「想像して描く」を設け、それらを体系的に指導することが必要だと主張し始める²⁾。この領域論の特に「観察して描く」は、当時の幼児造形教育界では反発を受けるものであった。当時の幼児造形教育は、子どもが生来持っている創造性や自由な表現を尊重する創造美育協会の影響を強く受けていたからである³⁾。また、幼児期の終わりごろの子どもは知的写実性を持った絵を描く。大人にとって絵がモチーフと似るといことは写真に近い（視覚的写実性）ことを意味するが、子どもはモチーフのすべての要素、子どもの視点から見えない要素までも描こうとする⁴⁾。言い換えると、実際に見えるか見えないかに関わらず、知っている物事を描こうとする。つまり視覚と描くイメージが一致しない時期であるともいえる。それでも、観察して描く活動はある程度定着し、現在もなお行われ続けているようにみえる。現代でもザリガニ等を描いた観察画が保育室に飾ってある光景をみることは珍しくない。一方で、近年の保育者養成校の造形分野の教科書としての書籍に、観察して描く活動が紹介されていないことも少なくない。新しい絵の会の三領域論以後の、幼児の観察画についての言説を論じた研究は見当たらないため、現在に至るまで実際のところどのように扱われてきたのかを知ることはできない。

本論ではまず、新しい絵の会が構想した三領域論とその中の「観察して描く」はどのようなものであったかを明示したい。そのうえで、戦後から現代にいたるまでの幼児の美術教育に関わる専門書や、造形や絵画製作について解説された保育者養成教育のための書籍に掲載された、絵画の指導方法論及び観察を伴う描画活動をめぐる言説をたどり、保育者養成教育における幼児の観察画の扱われ方を概観する。

新しい絵の会による三領域論と「観察して描く」

そもそも、新しい絵の会が描画活動を「経験を描く」「観察して描く」「想像して描く」の3つの指導領域に分けた理由は、表現活動のねらいを系統的に考えやすくするためである。これにより年間のカリキュラムや計画を考えやすくするというのである⁵⁾。また、これらの3つの指導領域が関連しあうことで子どもの描画の成長が促されると考えている点も、この三領域論の特徴である⁶⁾。この関連性についても各領域の内容を示しながら触れていく。

【経験を描く】

幼児にとっては直接経験したことが具体的に理解できる世界なので、それらをテーマにして、しっかり思い出して描く領域である⁷⁾。この領域ではあくまで「私」の経験を描くことが重要である。その理由は、図記号を使って表現する子どもを、視覚の記憶を用いて表現するように導くことができるからである⁸⁾。図記号とは、ヴィクター・ローウェルフエルドの子どもの絵の発達段階における図式期の幼児が盛んに描く記号のような概念的な形である。幼児に描いた図記号について尋ねると、子どもが表現したい具体的な内容（例えば、「ほくがきのうおつかいにいったときのことだよ」など）が含まれていることが多く、尋ねることを通して、具体的な視覚の記憶を描くように導くことができるというのである⁹⁾。そしてこの領域で思い出して描くことができないときは、もう一度観る必要性が出てくる。このことが次に示す観察して描く領域が必要な理由であるとしている。

【観察して描く】

経験をすることをより確かに描きたいと思うようになった子どもは、記憶だけに頼らず描きたいと思うようになる。またこの後に示す想像して描く領域に取り組む場合にも、同じような要求を持つことがある。そのような子どもが、今日の前にあるものを観ながら描き、ものをみる力を養うのがこの領域である。ただし、ものとの関わりの中でいろいろな発見をすることが目的であり、ものを正確に写すことを要求するものではない¹⁰⁾。

観察して描く領域に取り組むうえで、まず比較を用いた「みかた」を示す必要がある。幼児は事物を認識するのに、もみの木、いちょうの木というように個別の特徴を初めに理解するのではなく、樹木一般の特性を典型化（例えば、幹があり、枝があり葉があるなど）して認識している。よって、描く対象だけを示すのではなく、他とどう違うのかを比較を用いて示すと、物事の個別の特性を発見し、図記号を用いず描けるようになる¹¹⁾。

また対象に迫る方法は視覚で観察するだけではない。触ったり登ったりと行動をとらないながら観察するという方法も有効である。そして感じたことを言葉で表現すること、特に比喩的な表現を用いることも有効である。対象物に対して「何々のようね」と他のものに置き換える比喩を使って問いかけるようにすると、子どもがイメージを表現に反映させやすくなる¹²⁾。

[想像して描く]

物語などをテーマにして想像して描く領域である。想像して絵を描くには、経験したことや見たものが基礎になる。そのためこの領域は「経験を描く」「観察して描く」と深くかかわっている¹³⁾。題材は子どもが興味を持って、複雑すぎない物語がよい。挿絵などが掲載されている場合は、子どもたちが描く前には見せないほうが良いとしている¹⁴⁾。

以上が新しい絵の会が構想した三領域論である。新しい絵の会の三領域論による功績は、誰にでも可能な指導の筋道を示した点にあるといえるだろう¹⁵⁾。また、前述したが3つの領域が関連しあっている点に特徴がある。新しい絵の会の三領域は常に「経験を描く」「観察して描く」「想像して描く」の順に説明されている。これらに明確なレベルが与えられているわけではないが、この順で領域が関係しあっていることが示されている。最初の「経験を描く」に取り組む中で、次の「観察して描く」の必要性を感じるようになるし、最後の「想像して描く」に取り組むためには「経験を描く」「観察して描く」の経験がある程度必要になってくるということである。あとで、他の絵画の指導方法論及び観察を伴う描画活動をめぐる言説の内容を示すが、領域間で関連しあうことを明示しているものはほとんどない。

また、この領域の順番を規定しているものは、指導によって図記号による表現から脱却させるという考え方だといえるだろう。最初の「経験を描く」に取り組む子どもとコミュニケーションをとる中で、図記号ではなく視覚の記憶を用いて表現するように導き、次の「観察して描く」に取り組むレディネスを作る。「観察して描く」でも対象物を比較することにより、図記号を用いず表現できるようにする。最終的に「想像して描く」では「経験を描く」「観察して描く」での経験を基礎としながら図記号を用いず豊かな表現ができるようになるというわけである。

絵画の指導領域論及び観察画についての言説

それでは次に、戦後から現代にいたるまでの幼児の美術教育に関わる専門書や、造形や絵画製作について解説された保育者養成教育のための書籍の中の、絵画の指導方法論及び観察画をめぐる言説の概要を紹介する。

『幼児の絵画と製作』／1949年

幼稚園・保育所における絵画をその方法によって自由画・指定画・写生画・模様画・塗り絵の5種類に分類でき、自由画・指定画の中には思想画・記憶画・想像画が含まれるとしている。ここで述べられている自由画とは幼児が何でも好きなものを描く活動であり、指定画とは保育者が画題を指定する活動である。写生画については、真の意味での写生画は無理であるが、実物を見ながら描くことは一番切実に実物を観察することになり、目に映る事物を絵として描写する力を養う意味で大切であるとしている。また、幼児時代に物を、みる目と描く腕を養い、生涯絵画の趣味を持つこ

とは如何に人生を楽しくさせるか、と記載されている。ただし、楽しく写生画に取り組める環境を作って、決して写生を強制してはならないこと、幼児が描きやすいモチーフを用意する必要があることが書き添えられている¹⁶⁾。

『絵画製作』／1955年

描画は記憶・想像による描画と、物を観て描く描画に分けることができ、幼児期には、記憶や想像による表現が主要になるのは当然であるが、幼児にとってもものを観て描くことは無理であると決め、記憶や想像の描画のみを指導することには賛成できないと述べられている。そして、写生は大人に要求するようなものでなければ、必ずしも困難なものではなく、幼児らしい写生によって物を着実に観察する道を開いてやることも考えなければならないとしている。そのうえで、時計・人物等を描く活動例が掲載されている¹⁷⁾。

『幼児の絵画製作(幼児教育叢書)第8集』／1957年

第七章「単元展開と絵画製作」において、単元の展開の中での絵画製作の活動例が記載されている。単元「動物ごっこをしよう。」では園で飼っている動物の世話をすることから始まり、「動物園に行く楽しい期待の中で絵をかく。」そのあと、実際に先生や友達と一緒に動物園に行き、「動物園にいったことを話しあったり、絵にかいたりする。」そして、その絵を利用して紙芝居遊びをしたり、動物の真似をするあそびに展開する¹⁸⁾。記載内容の性質上、描画に特化した記載はない。

『幼児の絵画製作12カ月』／1959年

この書籍は12カ月分の幼児の絵画製作活動例が掲載されている。その中に観察画という活動例が掲載されている。観察力を育てていくために観察画は必要不可欠な活動であるとしたうえで、身近なものを正しく見つけ、捉える態度を養うことがねらいだとしている。そのうえで、顔をモチーフとした活動例が掲載されている¹⁹⁾。

『幼児の造形』／1968年

「観察と指導」と題された活動例が掲載されている。その中では、ただ客観的に対象をとらえることを子どもに求めるのではなく、子どもの感性を総動員して心でとらえようとする態度となるよう子どもと関わらなければならないと述べられている。そのうえで、かたつむりや花を描いた活動例を、活動に至った経緯から活動での子どもの発言、保育者の働きかけなどを質的に記述する形式で掲載している²⁰⁾。

『領域絵画製作の指導(保育内容研究シリーズ)』／1975年

「Ⅱ実際指導編」「(4)指導例」の中にはじめの絵、好きな絵、生活経験の絵、お話の絵、観察の

絵、みんなでかく絵、絵遊びの7つの例が掲載されている。お話の絵とは、新しい絵の会が想像して描く領域を表現する際に用いることがある言葉なので、生活経験の絵、お話の絵、観察の絵が並べて取り上げられている点からは新しい絵の会による領域論の影響を読み取ることができる。ただし、順番は異なっている。本書の観察の絵では牛の絵やザクロの絵が例として取り上げられている。牛やザクロをモチーフとして選択した理由は表現が概念的になりにくいことにあると、述べられている。一方でブタ、ニワトリ、ライオン、ネコなどの動物は子どもが喜んで描くが、概念的になりやすい欠点があると述べられている²¹⁾。新しい絵の会もモチーフの選定について、魚をモチーフにする場合はアジよりもカレイのほうが、子どもが持っている魚という概念にショックを与えることができ、興味を持たれやすいと述べていたことがある²²⁾。

その他の指導例についても、簡単に列記する。はじめの絵は園で初めてクレヨンを使う状況が想定された、模造紙などの大きな紙にグループで大きく伸び伸びと描く活動である²³⁾。好きな絵は保育室の黒板や壁に貼ってある大きな紙、その他自由に使ってよい紙と画材を用意しておき、好きな時間に好きな題材の絵を子どもが自発的に描く活動である²⁴⁾。みんなでかく絵はいわゆる共同制作である。そして絵遊びとは、魚の絵を描く活動の後、その絵を活用した魚釣りゲームに発展するといった内容の活動である²⁵⁾。

『幼児教育新絵画製作の指導』／1976年

描画の指導領域論らしきものは掲載されていない。目の前にあるものを観て描く観察画のような活動も掲載されていない。ただし、幼稚園で飼育している動物・魚・昆虫の観察による興味や愛情の深まりが造形活動に関係すると記載されている²⁶⁾。

『幼児画指導の手だて』／1976年

子どもの心象の表現を揺り動かす手だてとして、大阪府泉大津市立穴師幼稚園における造形活動の実践記録が収録されている。活動は「形から」「見る」ことから「材料をかえて」「経験をもとに」「お話の絵」「共同で描く」の6種類に分類して掲載されている。「見る」ことから、視覚による対象の形の認知が表現の基盤であり、みることが幼児にも大切とされることは当然であるとし、領域「観察の絵」の重要性を認めている。そのうえで、描かせる手段として観せることや、みることを描くことに直結させる方法に疑問を呈している。本書に収録されているのは、対象をみることや触れることをきっかけに展開した活動である²⁷⁾。

『幼児保育のための絵画製作』／1979年

本書では、幼児の絵画製作を「表現のかたちによる分類」をすれば、「自由表現」「制約表現」「模倣表現」に分類できるとしている。「自由表現」には生活画・観察画・構想画が含まれ、「制約表現」にははり絵・版画・飾る絵（切り紙やポスターなど）などが含まれ、「模倣表現」には塗り絵・う

つし絵が含まれるとしている。構想画とは新しい絵の会の三領域論でいう、想像して描く領域にあたるものである²⁸⁾。分類の名称が他の書籍にはみられないものではあるが、新しい絵の会が編集した書籍でも、絵の具・クレパス・ペン・鉛筆などによる描画活動と、紙版画やはり絵などを、顔や通園バスがモチーフであったとしても「つくる」活動として分けて分類している²⁹⁾。よって、内容は新しい絵の会の提示したものと大きく違うわけではない。

『保育叢書21 造形・絵画製作』／1980年

本書では、三領域論は掲載されておらず、指導の事例としてあらゆる活動が掲載されている。活動に至った経緯や出来事、その中での子どもの発言や保育者の働きかけが掲載されている。その中に「ざりがに（7月）観察を通して感動の深まりを」と題された事例が掲載されている。ある園児が初めにザリガニを園に持ってきたことから始まり、ザリガニの死を通して世話をどのようにするか話し合ったこと、遊びの中で観察が深まったこと、そしてザリガニを描く活動に至ったこと、そして活動の中での子どもの姿が記述されている³⁰⁾。

『幼児の造形・3－自己充実と造形・5～6歳児の保育の中で』／1984年

本書では、幼児画の4本柱として遊びの絵・生活画・お話の絵・観察画が紹介されている³¹⁾。観察画については視覚で捉えた通りを画面に再現させようとする傾向があることに疑問を呈しており、ザリガニの観察画を例にあげながら、観察画に「描かせた」ものが多いことを指摘している³²⁾。

『〈現代幼児教育研究シリーズ8〉造形（絵画製作）』／1984年

本書では、絵画活動の4本の柱として①遊びの絵（解放感を主とした活動）・②生活の絵（経験したことを主とした活動）・③お話の絵（想像や空想したことを主とした活動）・④観察画（知覚や認識を主とした活動）をあげている³³⁾。

『0歳からの表現・造形』／1991年

本書では、幼児期の描くあそびを「自由に描く〈自由画〉」・「思い出して描く〈生活の絵〉」・「見たことを描く〈観察の絵〉」・「お話を描く〈想像の絵〉」に分類している³⁴⁾。活動例「身近な小動物」では、飼育や遊びの中で十分に親しむと自然と表現活動に発展すること、観察画は色や形を捉えることもねらいの一つではあるが、子どもが感じたことを素直に表現すれば良いことが述べられている³⁵⁾。

『造形を中心とした「表現」—保育内容・「表現」』／1992年

本書は「指導の実際」として活動例を59種類紹介している。これらの活動例は「造形遊び」「かく領域」「つくる領域」「共同製作」4つに分類して掲載されている。「造形遊び」にはデカルコマニー

やフロッタージュ等の技法遊びが、「つくる領域」には紙版画や粘土、七夕飾りなどが含まれる。「かく領域」では22種類の活動例が紹介されており、新しい絵の会の三領域論のように明確に分類されているわけではない。ただし、活動例「遠足」は遠足の経験を描く活動であり、活動例「お友達のかお」は友人の顔を観て描く活動であり、活動例「ブレーメンの音楽隊」は童話を聞いた後に描画する活動である³⁶⁾。

『造形表現の指導』／1996年

「第6章子どもの遊び」の「1遊びとしての造形」の「③生活のなかから」の中に、芋ほりの経験を描く活動を例に、経験の有無によって描画の内容にも変化が現れることを記載されている。本書では観て描く活動については触れられていない³⁷⁾。

『表現の指導 造形』／1999年

第9章指導例の中に「生活の中から」「見ることから」「お話の絵」などの例が掲載されている。ただし、「紙で遊ぶ」や「積み木遊び」などと並列されており、絵画に限らない様々な活動を掲載している。「見ることから」には、観察画という言葉が色や形を正確にとらえて描写するものだと思うってしまうが、幼児の目と心でとらえた感動を率直に表現することが望ましいという旨の内容を述べたうえで、子どもの感動が素直に表現された作例が紹介されている³⁸⁾。

『表現—絵画製作・造形—〈理論編〉』／2005年

「第IV章幼児造形教育の方法」において「かく領域」を生活経験からの絵、観察からの絵、お話・空想からの絵、珍しい材料・用具・技法を使った絵、みんなでかく、簡単な版画の6種類に分類している。観察からの絵では、指導者が視覚のみにとらわれがちになることを警戒しなければならない、幼児にとってみて描くということは表面的な外観の写生をするということではなく観察することからの感動をイメージ化して表現することであると述べられている³⁹⁾。

『保育者のための基礎と応用楽しい造形表現』／2007年

「Chapter 4 実践プログラム集」の「描く楽しさ」の中に、「自由に描く」「記憶で描く」「見て描く・触って描く」「想像や空想して描く・お話の絵を描く」が掲載されている。「見て描く・触って描く」では、子どもにとっての観察画は見た通りに描くことではなく、見たり触ったり動かしたりして感じたことや発見したことを描くことだとしている⁴⁰⁾。

『新造形表現 理論・実践編』／2011年

幼児の表現は「心象表現」と「適用表現」に分かれるとしている。「心象表現」には「生活表現」と「空想表現」が含まれるとし、「適用表現」には「遊びや生活に役立つもの」、「機能的なもの（動

く、飛ぶ、音が出る物などを製作すること)」等が含まれるとしている。

「心象表現」に含まれた「生活表現」と「空想表現」の内容は新しい絵の会の「経験を描く」や「想像して描く」言い換えることができそうだが、「観察して描く」にあたるものの記載はない⁴¹⁾。

『生活事例からはじめる造形表現』／2015年

園での描画活動として生活画・観察画・物語画の3種類が紹介されている。観察画では、それぞれの子どもの思いを大切にすると記載されている⁴²⁾。

『心おどる造形活動—幼稚園・保育園の保育者に求められるもの—』／2017年

「第3章子どもにとっての造形活動の意味を考えよう」の中で、子どもが主体となって動物や植物を飼育栽培することの重要性が述べられている。そのような取り組みが観て描く活動につながった事例や、想像画につながった事例を紹介し、子どもの生活と表現のつながりが詳しく記載されている⁴³⁾。

『新造形表現 実技編』／2017年

「第4章保育実習に向けて」の「3 模擬保育の例」の中に「想像したことをかく」「お話の絵をかく」「見たこと・したことをかく」が掲載されている。ただし、「見たこと・したことをかく」はモチーフを観ながら描く活動ではなく、過去にみたことを描く活動のようである。よって新しい絵の会の「経験を描く」に近い内容である。よってモチーフを観ながら描く活動は掲載されていない⁴⁴⁾。

『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』／2018年

本書には、多くの素材や技法や保育の事例が収録されている。「第4章幼児造形教育への実践」の中に「6. 想像の世界を絵で表す」として「想像して描く」活動の実践例が掲載されており、幼児の想像画は経験や観察のイメージ化であるとしていると記載されている⁴⁵⁾。観察して描く活動の掲載はない。

『保育内容造形表現の指導〔第4版〕』／2019年

「第5章造形表現の内容と指導」の中に、砂遊び、積み木などの絵画に限らない様々な活動が紹介されている。それらと並列して「7 お話の絵(絵の具・コンテ)」、「8 生活の中から(コンテ)」、「9 線で描く」が掲載されている。「9 線で描く」では人物画を指導例として、年少期、年中期、年長期それぞれを対象に、人物をモチーフとした絵をどのように指導するかが掲載されている⁴⁶⁾。

総括

本論では、新しい絵の絵が構想した三領域論を改めて明示したうえで、戦後から現代にいたるまでの文献における絵画の指導方法論及び観察を伴う描画活動をめぐる言説を紹介してきた。これにより、保育者養成教育における幼児の観察画の扱われ方について、以下のような概観が得られた。新しい絵の会が三領域論を打ち出す1969年ごろより前から、観察して描く活動はよく紹介される活動であったが、その活動の捉え方は文献により異なっている場合が多かった。しかし、1969年ごろより後は、多くの書籍で「経験を描く」「観察して描く」「想像して描く」と同種の内容の活動が、並列した形で掲載されていることが多かった。それほど、新しい絵の会の理論に影響力があつたことがうかがえる。ただし、新しい絵の会が構想したような3つの領域が関連し合つて描画の成長が促されるという考え方はほとんど論じられていなかった。また、「観察して描く」ことに関して、子どもが感じたことを素直に表現すればよいこと、視覚の通りに描かせようとしてはいけないこと、観察して描く活動を行う前に園生活の中で題材とよく関わり子どもの興味が高まっている状態で行うこと等、注意しなければならないことが多く掲載されていた。裏を返せば難しい、実施して失敗することが多い活動であったのかもしれない。また、現在に近づくにつれ「観察」という語を使用しない傾向も読み取れた。そして1990年代後半や2000年代ごろからは、三領域から「観察して描く」を省いた形で掲載している書籍もあつた。このことから、観察して描く活動を保育者養成教育の中で学生に教えないケースも増えていることが推測される。そうなれば、当然保育現場で実践されることも減少していることが推測される。

今後、時代に合わせた保育が構想されていく中で、保育者養成教育の中に観察画という活動のカテゴリーが存在し続けるか否かは大きな問題ではないかもしれない。しかし、子どもの描画の発達過程が普遍的であるのなら、生き物の飼育を通じた体験等から、観察して描く活動を主体的に行おうとする子どもの姿に保育者が直面することは今後もあろう。新しい絵の会の「観察して描く」は、そのような観察して描く活動のレディネスを持った子どもへの保育の質の向上に資するもののひとつになる様に思える。今後、観察して描く活動について、過去の研究成果と反省を再度解釈したうえで、保育者養成教育の中でより適切に扱えるよう研究を進めていきたい。

参考文献

- 1) 黒川健一. 「保育内容造形表現の探究」. 相川書房, 1997, p.142-148.
- 2) 黒川健一. 同書, p.142-148.
- 3) 比留間良平. 「幼児の造形活動とその発達—積み上げ理論としての「おでん構造」—」奈良教育大学研究紀要31巻1号. 1982, p.57-73
- 4) G.H.リュケ. 訳: 須賀哲夫. 「子どもの絵—児童画研究の源流—」. 金子書房. 1979, p.179
- 5) 井手則雄. 「幼年期の美術教育」. 誠文堂新光社. 1969, p.112-122

- 6) 井手則雄. 同書, p.112-122
- 7) 井手則雄・湯川尚文. 「園児の絵画・製作」. 誠文堂新光社. 1969, p.18-34
- 8) 井手則雄. 前掲書, p.112-122
- 9) 井手則雄. 同書, p.112-122
- 10) 井手則雄. 同書, p.112-122
- 11) 井手則雄. 同書, p.112-122
- 12) 井手則雄. 同書, p.112-122
- 13) 井手則雄・湯川尚文. 前掲書, p.18-34
- 14) 井手則雄. 前掲書, p.112-122
- 15) 井手則雄・湯川尚文. 前掲書, p.1-2
- 16) 副島ハマ. 「幼児の絵画と製作」. 巖松堂書店. 1949, p.50-54
- 17) 川口四郎・渡辺鶴松. 「絵画製作」. ひかりのくに昭和. 1955, p.38-43
- 18) 教師養成研究会幼児教育部会 編著. 「幼児の絵画製作(幼児教育叢書)第8集」. 学芸図書. 1957, p.58-69
- 19) 大野元三・川村浩章・西光寺亨・多田信作. 「幼児の絵画製作12カ月」. 黎明書房. 1959, p.102-103
- 20) 磯谷桂治. 「幼児の造形」. 黎明書房. 1968, p.114-118
- 21) 林健造 編著. 「領域絵画製作の指導(保育内容研究シリーズ)」. ひかりのくに. 1975, p.76-80
- 22) 井手則雄. 前掲書, p.112-122
- 23) 林健造 編著. 前掲書. p.65-69
- 24) 林健造 編著. 同書, p.65-69
- 25) 林健造 編著. 同書, p.82-84
- 26) 阿部恒男. 「幼児教育新絵画製作の指導」. 建帛社. 1976, p.27
- 27) 岡一夫・井上明子. 「幼児画指導の手だて」. ひかりのくに. 1976, p.47
- 28) 井上俊郎・飯田泰造・新井規夫. 「幼児保育のための絵画製作」. 圭文社. 1979, p.46-49
- 29) 井手則雄・湯川尚文. 前掲書, p.183-227
- 30) 西頭三雄児・黒川建一・河村敏子 編. 「保育叢書21 造形・絵画製作」. 福村出版. 1980, p.104-107
- 31) 幼児造形教育研究会 編. 「幼児の造形・3—自己充実と造形・5～6歳児の保育の中で」. サクラクレパス出版部. 1984, p.24-27
- 32) 幼児造形教育研究会 編. 同書, p.20-21
- 33) 岸井勇雄・大久保稔 編. 「(現代幼児教育研究シリーズ8) 造形(絵画製作)」. チャイルド本社. 1984, p.42-48
- 34) 花篤實・辻正宏. 「0～4歳児の造形 なぐり描きから絵画へ・その指導」. 三晃書房. 1987, p.101-103
- 35) 花篤實・辻正宏. 同書, p.106-107
- 36) 久田淳・佐多透・大谷和子. 「造形を中心とした「表現」—保育内容・「表現」」. 東洋館出版社. 1992, p.55-102

- 37) 加藤怜子・日名子考三著. 「造形表現の指導」. 学芸図書. 1996, p.103
- 38) 熊本高工 編. 「表現の指導 造形」. 同文書院. 1999, p.54-80
- 39) 新川昭一 監修 花篤實・山田直行・岡一夫 編著. 「表現—絵画製作・造形—〈理論編〉」. 三晃書房. 2005, p.97-104
- 40) 子どもの造形表現研究会 編著. 「保育者のための基礎と応用楽しい造形表現」. 圭文社. 2007, p.53-55
- 41) 花篤實・岡田愨吾 編著. 「新造形表現 理論・実践編」. 三晃書房. 2011, p.57-59
- 42) 渡辺洋一. 「幼児の造形表現」. ななみ書房. 2015, p.51-52
- 43) 成田考. 「心おどる造形活動—幼稚園・保育園の保育者に求められるもの—」. 大学教育出版. 2017, p.150-151
- 44) 花篤實・岡田愨吾 編著. 「新造形表現 実技編」. 三晃書房. 2017, p.131, p.136-137
- 45) 樋口一成 編著. 「幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材」. 萌文書林. 2018, p.110-111
- 46) 村内哲二 編著. 「保育内容造形表現の指導〔第4版〕」. 建帛社. 2019, p.42-47

(しばた せいいち：専任講師)

